

東彼杵 ダラフ

6 / 23 郷 中尾郷

中尾と太ノ原の地区からなる中尾郷は、東彼杵町を代表するお茶の主産地。春夏の茶葉を摘み終えて一段落した中尾郷へ魅力を探しに上ってみた。

制作 地域おこし協力隊
文 飯塚将次
写真 堀越一孝
編集・デザイン 小玉大介





↑ 鮮やかな緑の景色の中、赤坊へ向かう。
9月中旬には道沿いにヒガンバナが咲く



↑ 棚田や茶畑の石垣はいろいろなタイプが
あってよく観察すると面白い



↑ 想像以上にきつかった仏坂。昔は農作業用の
牛を引いて上ったそう

中尾郷は標高 300 ~ 400m ほどの山間部にある。昼夜の寒暖の差が大きく、霧が立ち込めやすい気候は良質なお茶を育てる好条件となり、ほとんどの世帯がお茶農家。町特産のそのぎ茶の多くはこちらで生産されている。

彼杵川から中尾川に沿った道を車で上り中尾地区に入った。すぐに“美しい日本のむら景勝地 中尾郷 赤坊”という看板がある。現地を見たくなり、中尾公民館から歩いた。赤鳥居の中尾稲荷神社を通り過ぎ、看板の矢印の方へ進む。

8月はうんざりするほどの雨続きだったが、この日は久々の好天に恵まれた。畑へ急ぐ軽トラックが狭い道を行ったり来たり。すれ違うたびに笑顔と会釈の挨拶を交わすものみんな忙しそう。よく見ると若者が多い。

このあたりは茶畑よりも棚田が目立つ。伸びた稲は風に揺られて、ふかふかのじゅうたんのようだ。その先には大きな石を組み合わせて 2m ほど積んだ茶畑も出てきた。城址のごとく立派な石垣が続き、見ごたえがある。

小川をいくつか越えると、茶畑風景にガラッと変わった。中尾区長の中里一行さんに出会い、ここが赤坊だと教えてもらう。赤坊は農林水産省が実施した“美しい日本のむら景観コンテスト”において、農林水産大臣賞生産部門を受賞したエリア。手入れの行き

届いた茶畑と森林づくりが評価されたもので、針葉樹などの人工林が木材生産の役割を担うとともに、防風などの機能も持ち、お茶にとっても良好な生産環境になっているという。「仏坂から見んば。賞を取った写真はあそこからやけん」と中里さん。

受賞の決め手となった風景を求めて茶畑の中をさらに奥へ。仏坂は車ならばベタ踏みしなければ上れないほど急な坂だった。坂の茶畑で、作業する前の中里淳一さんに声をかけた。タオルを頭に巻いて畑へ入る姿は職人の出で立ち。中尾郷のお茶は美味しいと評判が高い。理由を尋ねてみると、「みんな情熱を持って取り組んでいますから旨かじゃなかですか。熱かのが多かですよ」とのこと。淳一さんは 30 代前半で 3 代目のお茶農家。2 代目は先ほどお話しした一行さんで、かわいい 4 代目候補も今年 1 月に誕生した。

中尾郷のお茶農家は若い後継者が元気だ。代々に受け継がれる畑を守るだけでなく、魅力あるお茶づくりをみんなが真剣に考えて実践している。「親父の世代も、俺らの世代も、下の世代もまとまっていますよ」と淳一さん。仲が良いだけでなく、刺激し合っているという。お茶の美味しさの秘訣がわかった気がした。淳一さんは「お茶はもちろん、この風景を守っていききたいですね」と話す。美しい茶畑の風景もしっかりと受け継がれている。



↑ 喜々津康さんの家にお邪魔して話を伺い資料やお宝を見せていただいた

仏坂からいったん町道へ、V（ブイ）の字にしぼらく上がっていくと太ノ原地区に出た。こちらも茶畑と水田が織り成す爽やかな緑の風景が広がっていた。

太ノ原公民館の近くに那太石権現という神社がある。古くから地元では子ども好きの神様として尊崇されており、明治の頃には学校のような存在でもあったという。近所に住む喜々津康さんが詳しいというので訪ねてみた。

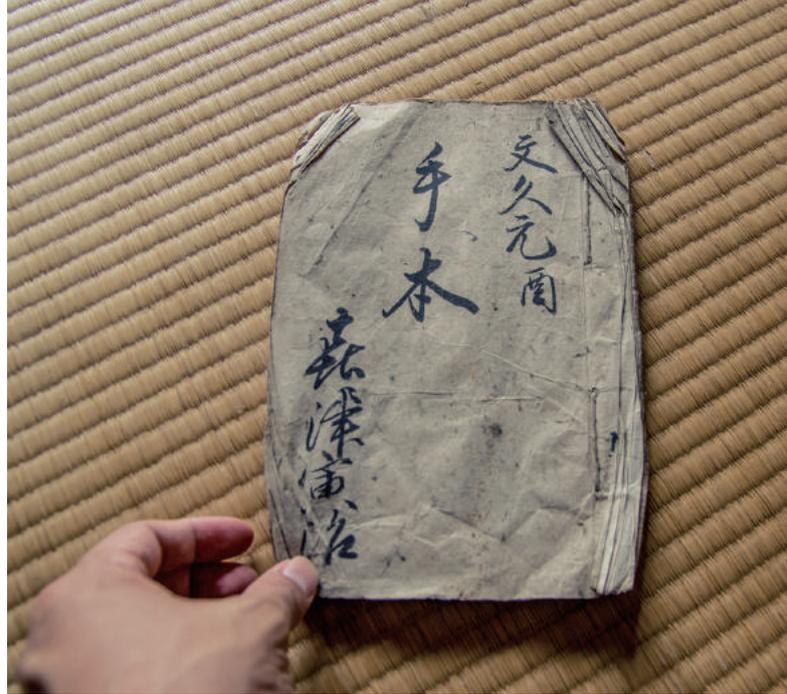
「当時は道が悪くここから大楠小学校までの通学は困難。そこで、私のひいじいちゃん（喜々津寅治元議員）が教育の場をつくったと聞いたとよ」と喜々津さん。表紙に“文章”や“雑書”などと書かれた、当時の教科書のような冊子を見せてくれた。茶色くなった和紙をめくると、手本となる文字が整然と並べられていた。裏にメモのように書かれた借入金証書も達筆だった。

喜々津さんもお茶農家。繁忙期に訪ねていたら聞くことができなかつたかもしれない、地域にまつわる興味深い話をたくさんしてくれた。那太石権現の右前方に小さな森があり、そこに町の指定文化財“オガタマノキ”が鎮座している。この巨木の根元にある八幡宮の石祠は、“フウの木様”として喜々津家の当主が代々まつてきたという。戦国時代には大村藩士が戦の祈願にたびたび訪れたそうだ。

「喜々津家はもともと諫早の出。2代目の喜々津薩摩さまは久山城の城主だったが、大村藩に仕えて彼杵に移住した。ここいらは長崎街道の裏街道として重要な場所だったとよ」

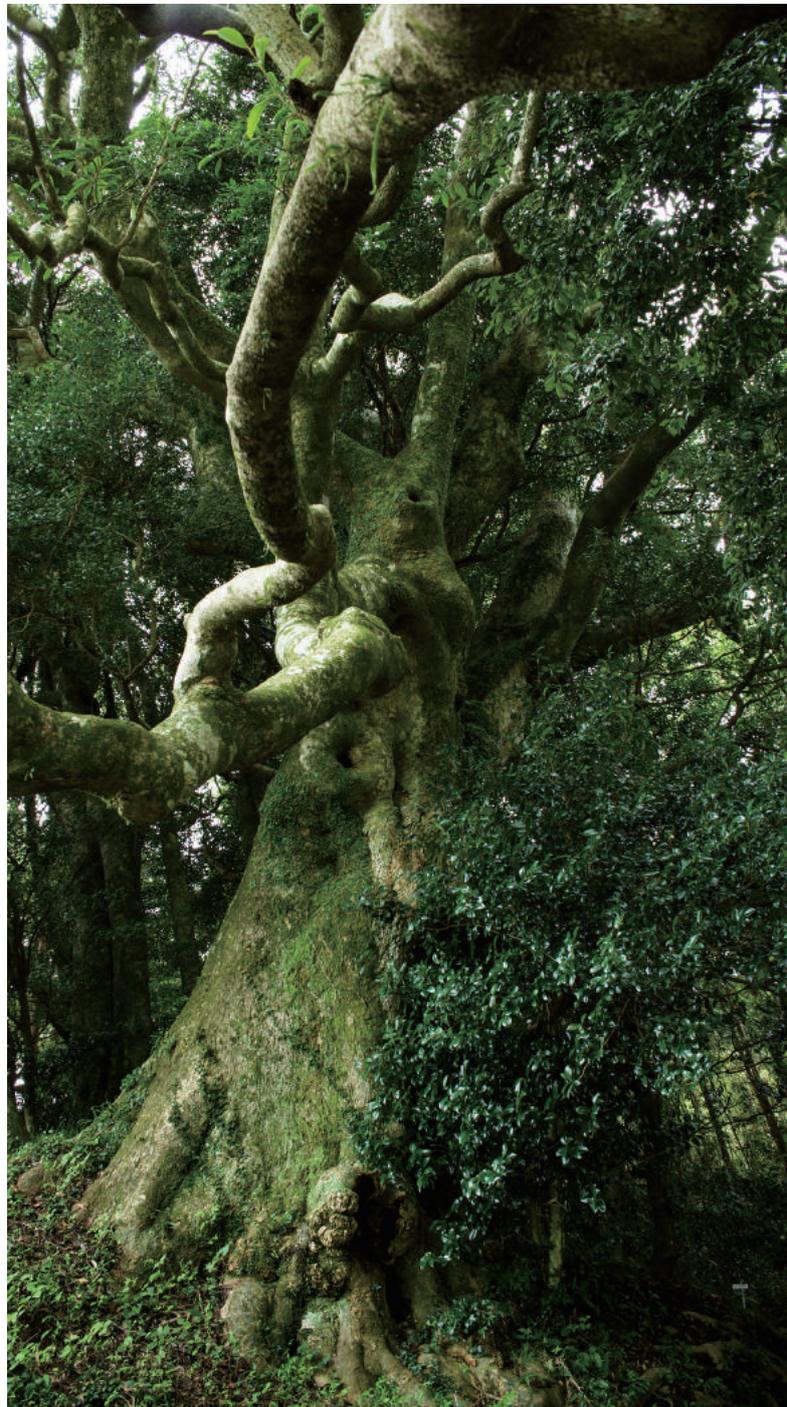
以前、町内小学校の総合学習の一貫として地域遺産めぐりというのがあった。子どもたちが喜々津さんを訪ねてくるようになったのをきっかけに、関連資料を探し集めて勉強した。先人の足跡をたどり、諫早の城址に足を運んだ。「自分のご先祖さまのことは知っておかんばね。きちんと子どもたちに伝えんば」という思いがあるからだ。

水量が増えた川の轟音を聞きながら中尾地区へ戻った。大きなカーブを曲がったところで、遠くに中尾地区の集落が見えた。山間に肩を寄せ合うように家が並んでいる。「みんな仲がよかですよ」という言葉を思い出した。



↑ 喜々津寅治氏が私費を投じて神社の社殿を教育の場に“手本”は当時のもの

↑ 抜群の存在感を見せるオガタマノキ。木の周辺は↓ 神聖なエリアのため土足厳禁





↑「自分のご先祖さまのことやけん
ちゃんと調べんばと思った」と康さん

夕暮れ時、喜々津家を再訪した。喜々津薩摩さまの命日にあたる8月22日（旧暦7月27日）、私たち3人も墓参りをさせていただいた。御神酒やそのぎ茶、水、まんじゅうなどのお供え物が並ぶ墓前に線香を手向けて手を合わせた。

「キリシタン大名の大村純忠氏に仕えたということは、薩摩さまもキリシタンの洗礼を受けとる」と喜々津さんは話す。豊臣秀吉が発令したバテレン追放令などを経て今日がある。当然、当時のものは何ひとつ残っていない。「この墓の深く深く下にキリシタンの信仰と関連するものが眠るとよ。表に出せない時代だったとやろうけん」

赤坊の景観といい、喜々津家のルーツといい、地域資源を掘り起こす面白さを実感でき、後世に残す大切さも教えていただいた今回の郷歩きだった。

※ 中尾郷へは、町営バス「中尾」
「中山入口」「太の原」のバス停を利用。

次回は川内郷。お楽しみに！

↓ 墓前で飲食しながら語り合い、花火をして薩摩さまと藩士を偲んだ

